

(5) 小麦の品種改良－2（道立農試） －秋まきのめん・春まきのパン用－

道立農試では、小麦の品種改良として、秋まき小麦と春まき小麦の両方に取り組んでいます。秋まき小麦は北見農試を中心に、上川農試、十勝農試、植物遺伝資源センター、中央農試、グリーンバイオ研究所がサポートする形で進め、春まき小麦は、北見農試と中央農試で育成を行い、それを上川農試、十勝農試がサポートする形で進めています。近年は民間（ホクレン）においても、春まき小麦の育種を始めました。

秋まき小麦は「寒地（北海道）向け秋まき、高品質めん用安定多収品種の育成」を目標とし、農水省北海道農試の秋まき小麦のパン用とは、一部目標を異にしています。

春まき小麦は「高品質パン用安定多収品種の育成」を目標とし、地域を道央と道東、道北で二分する形で進めています。

秋まき小麦の品種改良は、育種センターの北見農試でみますと、5 haの育成ほ場を持ち、全道に適する品種育成に取り組み、また、上川農試と十勝農試においても、それぞれの地域に適する品種を育成する目的で、F2世代からF5世代にかけて現地選抜を行っています。成績の良いものは、北見農試の育成系統同様系適、奨励試験に繰り入れられます。また、特性検定試験をはじめ、初期世代の系統の検定の形で、上川農試においては耐雪性、十勝農試においては赤かび病と穂発芽、中央農試においては赤さび病の検定を行っており、選抜の資として大いに力を発揮しています。

品質検定は、全面的に北見農試で行い、北見農試を始め、各地で育成された材料についてF3の早期世代から、めん試験をはじめとする品質試験に取り組んでいます。めんでは、適性の要因である、粉色と食感の要素であるアミロース含量で選抜を行い、後期世代になると製粉、めん官能試験を始め、各種品質試験を行います。

ほ場での選抜試験では、熟期、穂発芽、うどんこ病、赤かび病、赤さび病の病害、強稈性等の形質を重要視しています。系統選抜試験は、1万に近い数が扱われ、毎年5分の1ほどに絞られます。近年、「チホクコムギ」に置

き換わる品種として、「ホクシン」、「北見72号」が育成されました。道産小麦の次代を担う力のある品種で、良質小麦の安定生産に寄与すること大と期待されています。

育種現場では、「ホクシン」に置き換わる次の品種を目指しており、具体的には次のような目標を考えています。熟期は「ホクシン」並かより早生、めん適性は「タイセツコムギ」並以上とし、穂発芽耐性や赤かび病耐病性などを大幅に改良します。今後ますます各農試の連携が鍵となります。

春まき小麦は、北見農試、中央農試、ホクレンでそれぞれに地域に合った品種育成を目標としています。北見農試では3ha、中央、ホクレンは2haの育成ほ場をもち、ほ場選抜と品質試験を各地とも行っています。各育成地の選抜目標は、基本的には同じといえ、全道を対象とした春まき小麦品種の開発です。そのため選抜においては、共通の部分とそれぞれに特徴ある部分とがあります。

それぞれの育成地の特徴を生かして、北見農試は穂発芽と強稈性、中央農試は赤かび病、赤さび病というように選抜を強化する一方、お互いの材料交換を通して、選抜の補完を行っています。近年、「ハルユタカ」の改良型として、「春のあけぼの」、「北見春59号」、「春よ恋」の3品種が育成されました。最も新しい「北見春59号」、「春よ恋」は、特に製パン適性が優れ、さらに赤かび病耐病性や耐穂発芽性でも改良されていますので、今後春まき小麦の作付けが安定して、実需からも評価されることが期待されます。しかし、春まき小麦は、秋まき小麦に比較して低収に加え、収穫時期には天候不順に見舞われ、規格外となる頻度が高いのです。とくに近年は、安定栽培とはほど遠い現状にあります。厳しい環境下で新しい品種が、どれほど力を発揮してくれるかは未知数ですが、ハードルは高いことが懸念されます。

このように、春まき小麦の育種は、まだまだ大きく飛躍することが望まれています。しかしながら育種は、一朝一夕でできるものではありませんので、地道なステップの積み上げでしか解決はえられません。「ハルユタカ」より早生で、赤かび病耐病性や耐穂発芽性が大きく改良された、良質で多収の品種育成が待たれています。各育成地では、その基になる素材が着実にできていますので、近い将来これらを集積した、素晴らしい品種ができることを

期待したいものです。

<天野 洋一>